
一幕の雪夜 - North Princes and East Crown -

神内

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

一幕の雪夜 - North Princes and East Crown -

【Nコード】

N6689X

【作者名】

神内

【あらすじ】

純潔の女性による神聖政治の行われるガリアラ国では、「皇位継承者は婿を取るまで、男の姿を見てもその声を聞いても肉体に触れてもならぬ」という偏執的な戒めがあった。

しかし皇女サティスターシャは、かつて出会った少年のことが忘れられずにいた。その少年と再会したとき、国を揺るがすような出来事が勃発する。

サテイスターシャ（１）（前書き）

クラインズを一時中断して書いたものです。同じ世界観ですが、単体の話として読んでいただければ嬉しいです。

なお、時系列はクラインズの後です。

サテイスターシャ（１）

ガリアラの首都に位置する北界宮殿のヒイラギ離宮は、冬の日射しを浴びて白亜の大理石をにぶく輝かせていた。

といっても、差す陽光はほとんど灰色の雲にさえぎられ、とても弱々しいものだ。＜人造魔境＞という揶揄は、他の三大国と比べ人の出入りが少ない故の呼称だが、国内の状況を見てもまた＜魔境＞と呼ぶにふさわしい――二階に位置する自室の窓から「街」を眺めながら、わたしはそう思った。

「街」は宮殿に仕える使用人が住まう家の集まりであり、一応かたちだけが集合住宅街としての体裁を保っている。宮殿敷地内にもつけられたそこだけを、この部屋の窓からのぞむことができる。

ガラス戸に手を当てると、ひやりとした。この向こうは、だが、この冷ややかさなど問題にならないくらいとげとげしい冷気に満ちていることだろう。

一方、室内に満ちる暖気は、整えられた暖炉によるものだ。ことに寒さに弱いわたしは、この部屋を出ること自体ほとんどない。ましてや宮殿の外へ足を運ぶことなど、今まで数えるほどしかなかった。

だからせめて、こうして眺める。どこか生気が抜けきった「街」の風景を。行き交う女性たちを。しかしこのひとつの「街」ですら、宮殿のある敷地のほんのスズメの額ほどしか占めていないと思うと、それもなんだかむなくなる。

「我が国の都であるトートツスキーは四大国の中でも随一の規模を誇り、その巨大さは他の三国の比ではありません」

昨日の、首都機能と物流と納税の関係をとくとくと説いていた家庭教師の言葉が、ふと頭によぎった。

規模だけは、というのが正解だとなつさに思った。なんせガリア

ラは国土そのものが、他の三大国よりも図抜けて広いのだ。頭でっかちな大陸の形状のため、最北の領土はそうなるのが当たり前であり、なにも特別なことではないからだ。

もちろん、口には出さなかったけれど。

しよせん十六の子ども戯れ言でしかないから。

コンコン、と控えめに扉が打たれた。緩慢な動作で扉へと向き直り、応じる。

「はい」

「フィツポでございます。朝食をお持ちしました」

扉が開き、小間使いが配膳車を押して入ってきた。

「今朝の具合はいかがでしょうか、お嬢様」

「少し頭が重いけど、これくらいいつものことですから、平気です。……」

言いつつ壁から背中を離れたそばから足がもつれ、卓に強く手をついてしまう。慌てたようにフィツポが叫んだ。

「お嬢様！」

歩み寄り、肩を取る。

「ご気分が優れないのですか？ タツィアナ医師の回診を早めさせていただきます」

熱いタオルが差し出された。

「ありがとうございます。……暖炉のそばに置いてください」

指示にしたがったフィツポは、すぐに卓のそばへもどり朝食を並べ始める。健康面と味の面で、どちらも申し分のないように作られた王宮のお抱え料理人の渾身の作を、しかし愛でて喜べる気分でもなかった。

ああは言ったが、実際にどうやら体の感覚がおかしいことは気づいていた。床を踏んでいる感覚が希薄だ。なんだか頭のとっぺんがぼうつとしている。

体勢を立て直して、椅子に腰を下ろす。その足取りがふらついて

いたのだろっ、さらにフィツポが口を開く。

「お風邪を召されたのでしょうか。なにしろ昨晚はずいぶん冷えましたが。いずれにしろ急いでタツィアナ医師に来ていただきま

す」

「そうかもしれません。あまり食欲ありませんから……」
ナプキンをかけられたことを、ぼんやりとする頭の向こうで確認すると、わたしは魚と豆の料理を匙ですくい、少量だけ口に運んだ。それを見ていたフィツポが、さきほどよりもやや落ち着きを取り戻した、いつもの淡々とした口調で告げた。

「やはりご朝食より回診を先にいたします。お嬢様、宜しいですか？」

「そうでしょうか……では、よろしくおねがいし、ます・
……」

ぐらりと頭が揺れるのを感じた。卓に手を置き、とつさにテールブルナプキンを握りしめる。動悸が速くなる。呼吸が荒い。料理皿の輪郭がぼやけ、かすみ出す。

「っ……」

ガタン、という椅子の倒れる音と重なって、「お嬢様！」という小さな悲鳴があがった。

サティスターシャ（２）

「昨晚なにをなさっていましたか、サティスターシャ様」

寝台に眠るわたしをまじまじと見つめてくる、骨張った顔。お付きの家庭教師であるマリアは、三歳のときから付いている人で、見た目五十ほどだろうが、鼻眼鏡の奥の瞳はまだ澁刺とした——といったたとえばどうかと思うけど——厳しさをのぞかせている。

診察を終えた医師が、家庭教師の隣に座っている。名前はタツイアナ。こちらも若い女だ。困ったような片えくぼを浮かべて、まあまあと傍らでなだめるような仕草をしている。

わたしが倒れたと聞いたとき、部屋に飛びこんできたのはタツイアナだけではなかった。小間使いのフィッポを従えて、この女家庭教師も無機質なコツコツという足音を打ち鳴らし入室してきたのだ。寝台に運ばれ、診察を終えるや、さきほどまでフィッポのいた場所に座り、しっかりと背筋を伸ばして問う。

「昨晚、なにをなさっていたのか。正直に、お答えください」

「すぐに寝ましたよ……それがどうかいたしましたか？」

「本当のことをおっしゃってください。夜通し、一睡もせずに窓のところで過ごしていらっしゃった。——そうではないのですか？」

「……」

やはりばれていたか、と熱に浮かされた頭で考える。

しかししかたない、なんせ毎年、この月のこの日に同じことをくりかえしていれば、さすがに察しがつくというものだ。二年前にも一度、露見している。ならばこの習慣と今朝の体調不良が、この老年の女教師の頭でむずびつけて考えられても、なんらおかしくない。曖昧に頷くと、家庭教師は真一文字に唇を引き結んだまま、一度首を横に振った。

「お嬢様、二年前と同じことを申し上げなければならぬことを、私は口惜しく思います。睡眠不足は短期的に見ても長期的に見ても、

お嬢様にとって決して利となることはありません。そもそも――」

説教が始まると容易に終わらないことは、よく知っている。見えないようにこっそりため息をつき、教師から目を逸らすように姿勢を変えるが、くどくどという声は耳に届いたままだ。途中まで聞いていたが、やがて不機嫌になりそうな顔をさとられぬよう、すっぱり枕に顔をうずめてしまった。

「お嬢様！ お話の最中にそのような態度は・・・・・・・・・・！」

「マリアさん。お嬢様はご気分が優れられないのですから・・・・・・・・・・」

半分冗談でも言うように、ほがらかにタツイアナが割って入る。名前を呼ばれた女教師の不機嫌な顔が、ありありと頭に浮かぶ。

「分かっております。しかしまたお嬢様がこのようなことをなさつて、お風邪を召しては大変ではありませんか！ だからこそこうして口うるさいと思われようとも・・・・・・・・・・」

「でも、やつぱりここはお説教より静養が一番！ お嬢様も悪気があつたわけではないでしょうし」

「・・・・・・・・・・分かりました、タツイアナ。医者としてのあなたの意見を尊重しましょう」

言葉が終わるや、椅子の引かれる音に続いてコツコツ、という硬い音。素早く扉が開く音が、家庭教師が退室したことを告げていた。「私もこれで失礼いたします。タツイアナさんはお嬢様のそばにいらつしゃってください。なにかあつたらすぐにお呼びください」

その後、ときを置かずして朝の仕事を終えたフィツポも、固く一礼して出て行った。去り際、ちらりと扉口を見ると、胸の前で右手を左肩へ当てるといふいつもの所作をやってから、扉が閉まる。

暖炉の中で火が大きく爆ぜる音だけが室内に満ちた。

サテイスターシャ(3)

「お〜じょ〜さ〜ま〜」

半ばおどすような色さえうかがえる声の主は、当然自分と部屋に残されたタツイアナ。緩慢な動作で枕から顔を上げ、仰向けになると、頭上にのぞき込むようにした小間使いの顔があつた。

「いったいなんのことですか！ 夜中に一晩中起きていたあ!？」

すっかり素が出ているタツイアナがおかしくて、小さく苦笑をしてみせると、笑い事じゃありません！ という怒ったような返し。

「失礼・・・でもたいしたことではありません。ちよつとした気まぐれです」

「気まぐれで一度やったことなら、マリアさんにバレるはずもないじゃないですか！ さては習慣的にやってましたね〜？」

こうなるとごまかしもできないので、毛布を口元まで引き寄せて、せめて言葉を曖昧にしようと試みる。

「心配かけて申し訳ありません。もう下がっていいです」

「いいものですか。こうなったら今日は一晩中、見張っていますからね。うつん、三日くらいはつきつきりでそばを離れませんよ！」

顔を赤らめて鼻息荒く叫ぶタツイアナに、微笑みを禁じ得ない。

自分の氷のような凍てついた心が、彼女と触れあうときだけは解けていく、そんな気がするのだ。

彼女との交わりは、お抱えの給仕として一年前から入ったフィツポよりも長い。なんせ生まれたときから、病弱なわたしを診てくれているのだ。人前では他人行儀しているが、二人だけとなるとつみもない雑談に花を咲かせることもしばしばだ。

「しかしなぜそんな夜中に？ ……星でもご覧になられていたのですか？」

「そんなところです。昨晚は……………」

だがわずかばかりに眼を細めて脳裏に臣描く夜空は、昨晚の空で

はない。三年前の夜空だ。

「……星が、それは美しかったのですよ」

「そうでしたか。しかしやはりご無理はいけません。必ず夜は寝てください。そうしなくちゃ、今みたいに朝眠ることになってしまいますよ」

あつさりと飲み込んでくれたのは、正直ありがたかった。自分が嘘がうまいとは思わない。……いや、決して嘘ではないのだが。

「あー、でもいいなあ。お嬢様、わたしなんて最近星を見る間もなくてんでこ舞いなのですよ」

「ふふ……でも、残念ながら出会えませんでした」

「なににですか？」

「わたしが本当に見たかった一番星ですよ」

指を組み合わせてこぼすと、少し心ここに在らずという様子になってしまったらしい。嗜好きの女医師が目ざとく見とがめたように、
「お嬢様？ まさかとは思いますが、まさかどなたか殿方と……」

表情が、ややもすれば深刻そうなものだったので、つい身をかくしてしまう。

「……ありませんよ。それ以上滅多なことは言わないよう。お願いします」

自然と応じる声も強張ってしまう。タツイアナも少し顔を暗くしたままだ。

「本当ですね。信じてますよお嬢様」

「信じるも信じないも……そもそもそんな種がいることは、書でしか知らないのですから、会ったとしたら、興奮して卒倒する自信がありますよ。

でもタツイアナ。あなたは——殿方という者とお会いたことはあるのですよね」

「それは、まあ、人並みには」

「人並み？」

「あくまでも私は侍医ですから、高貴なお方と触れあうことがあるため、市井の者より制限はありますが、決して会う機会がないとはいえませんよ。お付き合いました人も、ま、まあそれは幾人か」

「それは興味深いですね。しかし煮え切りません。少なくとも、殿方というのを知ってはいるのですね」

「い、いけませんよ！ いけません！ 絶対にいけませんよ！ 私はこれ以上、話しませんからね。むぐぐぐ」

なにを警戒したのか、いや、それは明らかだが——タツイアナが慌てて手をぶんぶん振って、口に手を持って行く。

「殿方のことを知るのには、十八から……心得ています。それが王家に生を受けたときからの使命というものですから」

「ご理解してしているようなので、安心しましたが——そもそもこうしてお話していること自体、本当はいけないことなのです。マリア教師に知れたら、それだけでお説教ですから」

「そうですね、注意しましょう」

タツイアナの言葉が落ち着いたのを聞き届け、半身を起こす。安堵のため息とともに、なにげなく首を回して窓から下へと視線を向けた。ありえないと分かっているが、視線は彼を捜していた。

もちろんいるはずはない。ここは「そういう場所」だ。殿方が存在しうる場所へ向けて、この窓もつけられていない。ここから見えるのは、森とその手前に広がる西の「街」だけだ。わたしが行く全ての場所の窓も、そういうつくりになっている。だから見えるはずもない。

けれど彼なら、ありえる。この敷地内が男の出入りが厳しく制限されているような場所であっても、彼なら飄々として、不敵な笑みを残して悠々と抜け出してしまうだろう。

彼は、そんな人だ。

たった一夜しか過ぎせなかったけれど、それはよく知っているから。

リエイン（１）

雪こそ混じっていないが、超冷風が顔をたたき寒期の真っ只中。しばらく続いていた無力感が、とうとう自分を死の手前まで追いやっている——防寒もせず、ただ北へ北へと歩いているのを意識した時点で、リエインはそう思った。

<人造魔境>の名にふさわしく、北へ北へと登るにつれて——つまり国境に接近するにつれて、配置されている怪物も超弩級と評すべきようなものになっていった。それらを丁寧な、一体一体屠るふっつていく。意志はない。ただ本能が剣を振るわせるだけだ。死んだような目、操られたようなうつろな拳動が、そのことを暗に告げていた。

ただ木々が立ち並ぶだけの黒海原の寒期に、食べものなどあるはずがない。最後に食ったのは、なにかの肉だったと思う。あれはなんだっけ……。とぼんやりと考えながら、右手を超高速度で動かし、飛びかかる四つ足どもを無意識に撃退していく。いつそ誰かがこの腕や首を食いちぎってくれないか。そうしたらこの鬱屈とした気分から放たれるに違いない。そんなことを、やはりどこか上空で思いつつ、的確に急所だけを狙っている右腕が恨めしく思えた。しかも幸か不幸か、葉の落ちた木々が空疎にならぶ森も、そろそろ途切れているようだった。黒海原でも‘半島’に匹敵するほどの難所さえクリアすれば、しばらく生命の危機もないだろう——その事実、半ば安堵し半ばうんざりしながらリエインは森を出た。

さらに歩を進め、ガリアラの第十三関所に行き当たる。ちょうど東西の中間地点に位置する関で、首都までもっとも近い関所とされる。大国でいくつか犯罪めいたことはしたが、露見こそすれ顔は見られていないため、問題なく通ることができた。わずかばかりの関銭を置く。ここで金が尽きたが、どうでもよかった。

関所を越えて目に入っただのは、灰色の天だった。強い風が骨の髄まで凍らせていくようだった。久方ぶりの訪問の第一印象は、最悪だった。

一度肩を震わせ、浮浪者のごとき足取りでリエインは歩みなおした。草ひとつない寒々とした丘を越えてたどり着いた市街地は、これまたなんともいえぬ暗さがただよっていた。ねずみ色の防寒着に身をつつんで通りを行き交う市民の顔に、活気というものはなかったのだ。

「変わらねーな……三年前と」

ぽつりと呟く。

「空腹より先に、寒さで死にそうだな。はは」

金もなく、宿もない。ほおっておけば路頭で行き倒れるだろう。寒期は商人、平民問わず貧しくなるこの国で、よけいな荷物を拾う輩もあるまい。かたきばかりの施療院も、そこの民家とたいして変わらない。

これでいい。野心は果てた。剣も折れた。最後になぜここに引き寄せられたかは皆目分らないが、それでもここはのたれ死ぬにはもってこいの国だ。

ゆつくりと指先をさわると、触れた感覚がなかった。肩と顎の震えが止まらない。だが今日という日が明けたら、全身は冷たく固まっているだろう。一步、一步。痩せこけた足を進める。ほとんど歩いているという自覚さえ失せている。

素足で石畳を進んでいると、唐突に背骨がくずれた。これまで支えていた最後の体力が、春の日射しをあびた淡雪のように、掻き消えた。

たえきれず、倒れ込みか細く息を続ける。周りを少ないながらも人が歩み去っていく。ああ、死ぬな——と他人事のように思った。

「……はは、ねーちゃんのこと、笑えねーよな、これじゃ・
……」

いまわの際、黒海原で助けた少女の顔が頭をかすめ、そしてゆっ

くりと滲み消えていくにつれて、視界も徐々に狭まっっていく。最後に見た二人の顔を、噛みしめるように思い起こしながら――。

「ありい大変じゃ。おにいさん、しっかりしゃーさい」

ガタガタという車輪の音に続いたしゃがれ声に、沈む意識がゆっくりと引きずり出された。

リエイン（２）

「おにいさん・・・（モゴモゴ）・・・正気かえ・・・うちらでもそんな薄着じゃ往来を歩かれんのに・・・（モゴモゴ）・・・寒さに強いわけでもないよそモンが・・・そんな格好で・・・（モゴモゴ）」

御者台から、老婆の不明瞭な言葉が届いた。

後ろの荷車にぼつねんと収まっていたリエインは、これ以上待っていてはすべてのセリフを言い終わる前に日が暮れかねないと思って、先手を打った。

「いや、助かりました。どーも俺は昔っからそそっかしくてねえ。今が一番北風がきつい時期だつて忘れて、ちよいと宮殿見学でもしよつなー、なんて考えてたんですよ」

おそらく商品用として積まれた毛皮に身をくるんだまま言つと、
「そりゃ運がええ・・・（モゴモゴ）・・・見てのとおりあたしは商人で・・・（モゴモゴ）・・・ちょうど今、今年の遠地での仕事を終えて・・・（モゴモゴ）・・・あとはトートツスキーのに戻るだけ・・・（モゴモゴ）・・・なんじゃ」

「ここから都まではどのくらい？」

「なにい・・・（モゴモゴ）・・・そう遠くありやせんよ。ほれ、ほんのすぐそこじゃ・・・（モゴモゴ）・・・おにいさん、宮殿へ行きなさるのかね」

都市を抜けまた人氣が皆無となった田舎道を、粘っこい口調を車輪の回る音だけが満たしていた。

「なんつーか、外から見ればいいかな、と？　そう思ったりするんですが」

「ふむ・・・（モゴモゴ）・・・寄り道するかえ」
「え？」

馬がブルブル、とうなった。かと思うと、ちょうど行き当たって

いた十字路から馬車は右に折れた。そちらはゆるやかなカーブを描いて、また小さな裸木ばかりの林へと伸びている。

驚いて縮こまった背中を見上げると、それを察したのか、老婆も皺の走る小さな顔を半分こっちにに向けて、

「こっちが、ええ」

とだけ言った。なにがどういいのだろう。

その理由は、林を抜けたところですぐに悟ることとなった。荷車から顔をのぞかせたリエインの目に、遠目にだが、白く輝く球形のドームが目に入った。全貌がうかがえずとも、天頂部だけでそれを備える建築物の壮麗さ・巨大さが手に取るように分かる。

北界宮殿。王家その他、重要貴族の住まう広大な建物だった。久方ぶりに見たというのに、途方もない白妙の美しさに、思わず見ほれてしまう。

「うつくしじやろ・・・（モゴモゴ）・・・せつかく見やすいところ行ったんじゃ・・・（モゴモゴ）・・・よく目にやきつけておけ・・・（モゴモゴ）・・・」

リエインは半ば上の空のまま、短く嘆息した。

——まさか、またホントに見ることになるとはな・・・。

「ところでいさん」

と鶏のような顔を、また老婆はこちらへ向けて窮屈そうに唇を動かした。

「その荷物はなんじゃ？」

視線は背中へ注がれている。我に返って、屈託なく笑ってみせた。

「はは、くだらねーものですよ。あんまり重くて背負うのもイヤにならあ」

「ふむ・・・（モゴモゴ）・・・なら、荷車に置いとくがええ・・・（モゴモゴ）」

短く言って、老婆はまた顔を前方へ戻した。

同じくそちらへ眼差しを向ければ、ガリアラの首都トートツスキ―を覆う高い街壁がゆっくりと近づいてきた。

リエイン（3）

都市に入ると、いつそう宮殿の存在感は増してくる。トートツスキー自体がほかの三国と比して巨大な都だというのに、宮殿のある敷地はその二割も占めるといふから驚きだ。もっとも三年前、宮殿に忍びこむために調べた情報であるため、若干の変化があるかもしれないが。

といつても、こちらは北界宮殿、『業界用語』でいうく女宮>であり、貴族、とくに王族の女人の住まう宮殿だ。ここからは遠すぎてほとんど見えないが、これとちょうど反対側にあるのが、正式名は忘れたが通称く男宮>。文字どおり、貴族の男が群れ集う宮殿であり、こちら本宮ではないにしても立派なものらしい。

そうこうするうちにも、馬車は進む。いくつかの道をさらに右へ右へと曲がり、ついに見上げるような高さの外壁に沿った道へと入った。こちらはこちらで家屋はなく、全身を冬装備で武装した騎士たちが闊歩している。遠くへ目を向けると、塔形の物見櫓を付属させた城門のようなものがうかがえる。

少しだけ懐かしかった。

潜入した際に使ったのはこちらの小門で、どうやら小間使いや御用商人などの搬入口として機能している門扉らしい。これの数倍はあるという本門はここから真っ直ぐ行つて右折し、さらにずっと進んだところにある。

「巨人族の住処かよ。今のローウェンで造つたら都市民につるし上げられそうだな」

ぼんやりと独りごちたとき、老婆がしなびた顔をこちらに向けた。

「下りい」

「は？」

「・・・（モゴモゴ）・・・都合がわるい」

なんのことか、と思つたがどうもさつきから通りを歩く騎士たち

がうさんくさそうにこちらを見ていたのだ。なるほど、やはり男という種の扱いが独特だな、と思いつつ納得して馬車を降じる。

だが、どうやらただ周りの兵の視線が集まるのが不快だ、という話ではなさそうだった。「待つとれ」

言うなり、少し速度をあげて馬車が進む。遙か彼方にあるうずたかい城門の前で止まる。

「おい——って、ええ？」

なにかを門脇の騎士に掲げたかと思うと、兵が馬車の積み荷を確認するような仕草をして、あっさりと城門を通した。

慌てて走法で後を追うと、閉じた城門にいたる前に兵によって制止された。しかたなく壁に沿って引き下がり、じっと待つことにした。

ふたたび聞き覚えのある車輪の音が聞こえてきたのは、それからずいぶん経つてのことだった。振り返ると、また門兵が、直後に内から出てきた馬車に対して城門を開いていた。

呆然と見守る中、馬車はやや加速気味にこちらへやってきて、ぴつたりと真横で止まった。

「乗れい」

「あ、あんた……」飛び乗りながら、「商人って御用かよ」

「違う……（モゴモゴ）……そうかもしれん……（モゴモゴ）

……街への供給が主じゃからの……（モゴモゴ）……」

毛皮はすべてなくなっていた。こりやずいぶん寒々したなと思いながら、中央に飛び乗りながら聞き返すと、

「街は使用人の詰め所じゃ……（モゴモゴ）……使用人の」

「ってことは女しかないんだな。へー、そりゃハーレムだ。王族の女に手出すよりよっぽど安全だあ」

「余計なこと考えるな……（モゴモゴ）……小童でも越えりや・

……（モゴモゴ）……容赦ないぞ」

「心に留めておくよ」

軽々に応じると、細い顔がまたこちらを顧みた。皺にうずまつた瞳が、少しだけ細められる。

「商会の信用に関わるもんじゃ・・・（モゴモゴ）・・・下働きとはいえ、うちが雇うもんには変わらんわけじゃからの・・・（モゴモゴ）・・・問題起こしたら八チミツの納入にも差し障る」

「ああ、まーそりやそーかもしれねえけど・・・つて、今なんつた？ え、雇う？」

ふたたび老婆の顔が、半分だけこちらを見た。

「にいさんや・・・（モゴモゴ）・・・恩を仇で返すような真似せんじやる・・・（モゴモゴ）・・・老い先短い婆アひとりで寒期の力仕事やらせる気かい。」

ほれ、商会はそこじゃ。支度をせい」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6689x/>

一幕の雪夜 - North Princes and East Crown

2011年11月4日03時11分発行